

## 「よみがえれ長良川」集会宣言

「宝の川だった長良川は、魚の棲まないおぞい川になってしまいました。清流長良川は昔のことでず。」 長良川とともに生きてきた川漁師の悲痛な言葉です。

長良川の河口を塞ぐ河口堰のゲートが閉鎖されて、明日7月6日で20年になります。海との繋がりを断たれて、長良川の環境は大きく変わりました。

河口堰下流部の豊かなヤマトシジミの漁場が失われました。堰上流部では、汽水域がなくなり、広大な芦原は9割が姿を消し、生き物たちは棲みかと命を奪われました。堰はサツキマス、アユ、ウナギ、ヨシノボリなど、海と川を行き来する生き物の大きな障害となっています。長良川の象徴でもあるアユの漁獲高も激減し、魚苗センターでの稚鮎の生産と、漁協による河口の人工水路での孵化放流で、ようやく漁獲を確保している現状です。人の手を借りてしか個体数を維持できないことから、昨年、岐阜市のレッドリストで準絶滅危惧種に選定されてしまいました。

もの言えぬ生き物たちが私たちに、長良川の変化を必死で訴えているように思われます。河口堰の影響は下流部だけでなく中流、上流へと及んできているのです。

この20年は、失われてしまったものがいかに大切なものであったかを、改めて考えさせられる歳月でもありました。川の恵みを未来につなぐためにも、長良川をかつてのような、海とつながる豊かな川に再生しなければなりません。

今、流域では農業や林業、伝統産業、観光などさまざまな分野で、地域にある豊かな資源を大切に使い、新たな取り組みをはじめめる若者たちや動きが生まれています。「鵜飼漁の技術」が国の重要無形民俗文化財に指定され、長良川中、上流域が「世界農業遺産」登録を目指すなど脚光をあびています。

那珂川からの報告では、地域に根付いた漁業を守るために立ち上がった人々に感動しました。

「川も流れてこそよみがえる。」

撤去が進む球磨川の荒瀬ダム現地からの報告を伺って、そのことを確信し、希望を持つことができました。

河口堰の目的であった工業用水は一滴も使われていません。最大の利水者である愛知県が委員会を設置し、環境改善のために河口堰の試験開門をしようと提案をしています。2010年に名古屋で開催された生物多様性 COP10 で採択された愛知ターゲットの中間年でもある今年こそ、長良川の再生のための大きな一歩を踏み出すときです。一日も早く、国と愛知、岐阜、三重の関係各県が話し合いをもち、開門調査を開始することを切望します。

長良川をよみがえらせるため、流域の、そして全国の心ある人々とともに、私たちはこれからも努力を続けていきます。

2015年7月5日

「よみがえれ長良川～河口堰20年・開門調査実現を！」

集会参加者一同